

はばたき通心



御船町立御船中学校
特別支援教育通信
令和3年1月 発行

御船中学校では、特別支援教育の充実に向けた取り組みを進めています。特別支援教育とは、生徒の自立と社会参加を目指すために、一人ひとりの教育的ニーズを把握し、持てる力を伸ばし、生活や学習上の困難を改善または克服するために適切な指導及び必要な支援を行うものです。

「保護者の皆様とともに理解し、協力し合って子どもの成長をサポートしていきましょう。」との思いから、特別支援教育通信を発行しています。今回は、主にお子様のことに関する相談から支援体制の確立、実践までの流れを紹介したいと思います。

一人で悩まないでください!!

お子様のことで気になることはございませんか？お子様の様子に気づき、悩まれること自体が、子どもたちが安心して日常生活を送れるための大事な一歩となります。

こんなことで困られていませんか？

学習に関すること

- 計算はできるけど漢字や文章題が苦手。
- 文字の並びや大きさが揃わない。
- 文章を読むのが苦手。
- 黒板をノートに書き取るのに時間がかかる。
- 筆算の桁が崩れやすく、計算間違いが多い。
- 音読で行をとばしてしまうなど、読み間違いがよくある。

行動に関すること

- 落ち着きがなく、じっとしてられない。
- 気持ちがすぐ不安定になってしまう。
- 急な予定の変更に柔軟に対応できない。
- 話を最後まで聞かずに行動することがよくある。
- 一つのことに興味をもつと、他のことが考えられない。

人との関わりに関すること

- 人前で話すことが苦手。
- 場に応じた行動をとれないときがある。
- 友だちとよくトラブルになる。
- 人の意見を聞かない。冗談やユーモアを言葉通りに受けとめてしまう。よく話をするが、会話が一方的でとびやすい。
- 友だちを求めるが、関係をうまく築くことができない。
- 自分の思ったことを場を意識せずに言ってしまう。

このような行動の原因としては、本人の努力だけでは解決できない困難さが深く関係しています。いくつか当てはまる場合には、特別な支援や配慮が必要な場合があります。

子どもに寄り添い、その姿を認め、自信や意欲をはぐくんでいきましょう。

適切な対応

手立て
温かさ

- ほめる 認める 励ます
- 具体的な解決方法を示す
- 成功体験
- 意欲 自信 成就感 安心
- さらなる成功体験

安心できる学校生活

- 心の安定
- 学習・生活への自信や意欲
- 自己肯定感の高まり

子どもが困っていること

- 学習上の悩み
- 行動上の悩み
- 対人関係の悩み

小さなサインを見逃さないようにしましょう。

子ども達の言動から、「困っているよ」「手伝って」「ちょっと助けて」というメッセージを受けとめましょう。

まずは学校へ
ご相談ください
(早めのご相談を)

不適切な対応

無理解…

子どもが
自信をなくす
ひと言

- ×なんで、できないの？
- ×ちゃんとしてね！
- ×わかってないね
- ×はやくしてよ！…など

無理な要求

戸惑い

悩み

不安

失敗経験

過度の叱咤

二次障がい

- 情緒の不安定さ
- 無気力
- 自信喪失
- 反抗
- 対人不安

学校への相談から支援までの流れ

相談窓口は…

- 学級担任
- 特別支援コーディネーター
- 学年主任や養護教諭

保護者や学校、関係（専門）機関との連絡・調整をする役割を行います。

*生徒からの相談や、教師が子どもの様子を観察しての気づきから、保護者への相談後に支援がスタートする場合もあります。

本人や保護者、学校との話し合い、専門機関の巡回相談等による**生徒の実態の把握**。
(専門機関による発達相談、発達検査)

専門機関の助言を受けて、校内支援委員会の中で**支援内容や方法の検討**。

必要に応じて「**個別の指導計画**」「**個別の教育支援計画**」の作成。

生徒の指導方針などについて、**教職員間で共通理解、学校全体で対応**。

通常学級

担任をはじめ教科担当、学習・生活支援教員が、特別な支援を必要としている子どもたちが安心して学べるよう配慮しながら、授業や生活のサポートを行います。

交流及び共同学習

生徒同士も、互いに支え合う関係が生まれ、優しい心が育ちます。

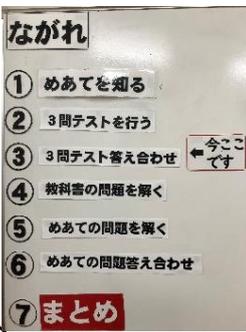
特別支援学級

生徒の特性等に配慮しながら指導・支援を行い、少人数で学習します。現在、御船中学校には、「知的障がい学級」「自閉症・情緒障がい学級」「難聴学級」「肢体不自由児学級」の4学級あります。名称は「はばたき学級」「かがやき学級」です。

通常学級で授業を受ける生徒、特別支援学級で教科の個別学習を行う生徒、特別支援学校の教育課程に沿った学習を行う生徒と、子どもの特性や卒業後の進路希望に応じて個別に対応しています。

子どもが安心して学習し、行動できる環境を整えていきます。

- 一時間の授業の流れや作業手順を事前に示す。
- 情報刺激の少ない環境作り。生徒が学習内容（黒板の文字や資料）を注視できるようにする。



- 時間の感覚を視覚や聴覚で提示。時間が減っていくの見えるタイマー等を利用する。



支援の実例

学習場面における支援

- 読む行に紙や定規をあてたり、傍線を引いたりする。
- 文章の内容を理解する際、「いつ、どこで、誰が、何を、どうした」等で文を捉える学習を行う。
- 各教科の文章問題に記述されている、「ちがい」「理由」「12文字（以内）で書く（抜き出す）」「選ぶ」等のキーワードに気づかせる。
- 板書は、チョークの色を適切に使い分けて書いたり、学習内容は違っても書く順番などをパターン化したりする。
- 学習シートを作成し、書く量を軽減する。
- 説明の際、写真や図、表などの視覚的なもの活用する。
- 「きちんとしなさい」「しっかりしなさい」ではなく、「〇〇を3回します」など、具体的に指示を出す。
- 授業をいくつかの展開に分け（説明を聞く、書く、話し合う、発表する等）メリハリをつける。
- 座席を工夫し（窓際から離す、前側にする）、授業に集中し、個別支援を受けやすいようにする。

行動面、対人関係における支援

- 急な変更がある場合は、できるだけ早く知らせる。1日の流れは朝の会等で確実に伝える。
- 『うまくいかなかった場面』を本人と一緒に振り返り、どのように行動すれば良かったのかを考える。
- 基本的な会話の仕方や、友だちの誘い方などのコミュニケーションスキルの学習を行う。
- 急な変更パニックにならずに、うまく対応できたときは、ほめる。
- 考える際には、話すだけではなく図示したり文章に表したりして、相手と自分との関係が見えるようにする。
- 本人の得意なことをいかして、周囲に認められるような機会をつくる。
- 「〇〇はだめ」「〇〇しない」よりも「〇〇します」等の肯定的な指示を増やす。

子どもたちの得意なことやよいところに目を向けましょう。

どの子どもにも個性があります。必ず「よさ」や「得意な面」があります。一人一人の得意なことや特性をしっかり見て、うまくできたときは必ずほめましょう。ほめることで自分のよさに気づき、得意な面をのびしていく意欲がわいてきます。

自信や意欲が高まるように、背中をそっと押すような支援や声かけを一緒に行っていきましょう。



目標は、支え合いながら自立した子ども達＝「生きる力」

子どもの「生きる力」を育てるには…

成長する力を信じる



身の回りの整理整頓や学校に行く準備など、ついつい時間がないからと、何でも手伝ってしまうことはありませんか？

今はできなくても、必ずできるようになる可能性をまだまだたくさん持っています。自分で成長する力を持っている子どもを信じましょう。

根気強く見守り、ていねいに（段階を踏んで）声をかけていくことで、今よりもっと自信が育ち、自分から行動できることが多くなります。

一人でやりきらせる



人には、それぞれやりやすい自分なりのやり方があり、特別な支援が必要な子ども達ほど、もっとはっきりとしています。

親から見ると、回りくどかったり、たどたどしいやり方であっても、その子の今の能力でできる一番良い方法なのかもしれません。

子どもが何かをしようとしているとき、すぐに「ダメ」と言うのではなく、「一人でやりきらせる」ということが子どもの学習能力を高めたり、責任感を育てたりすることにつながります。

子どもの気持ちをささえる



子どもの「がんばろう」という気持ちの源は、大好きな家族に見てほしいという願いでもあり、家族の愛情は、社会（学校）へ出て行くための大きな力になります。

自分を認め、愛してくれる人がいるという事実が、子どもが社会の中で自分らしく頑張るためのエネルギーとなります。

子どもの気持ちを支えるのは、「子どもの喜びや悲しみに共感する」ことから始まります。

サポーターをつくる



「自立して暮らす」とは、自分でできる役割はしっかりと果たし、一人ではできないことは周囲の人に支援してもらいながら、地域の社会の中で暮らす（共生）ことです。一人で何もかもできるようにならないといけないわけではありません。

大切なのは、地域社会の一員としての自覚と責任をもって、自分でできることは自分でやろうとすること、そして、できない部分は支援してほしいと伝える方法を身に付けることです。小さいときから、地域の人と接する機会を多く持てるようにしましょう。

そして最終目標は…「働くこと」

ちょっと先の話になるかもしれませんが、障がいのあるなしや、障がいの程度にかかわらず、全ての人にとって「働くこと」「職業に就くこと」は、基本的な権利としてとても大切なことです。極端な話ですが、「働けないかもしれない」「働かせるのはかわいそう」と決めつけて、この先ずっと何もさせない生活を送らせることは、子どもの立場からすると、自分自身を認めてもらっていないことと同じです。

「働くこと」は経済的な利点以上に、生活の質の向上（よりよく生きる）ために必要です。「子どもは将来、適切な場所で働き、適切な場所で暮らす大人になる」という視点で、「できる仕事」「できる支援」をみんなで考えていきましょう。子どもを「働ける人」として見るのが大切です。

国立特別支援教育総合研究所の牧野泰美先生の話です。とある研修会で、「子どもの発達には、子どもの心に寄り添うこと、今をいっしょに楽しむことが不可欠であり、人と人がつながったところにことばは育まれる。その時に傾聴姿勢が大切である。」ということで、「子どもの話を聴くときは」という詩が紹介されました。ご一読していただけたらと思います。

子どもの話を聴くときは

- 1 子どもの声を聴くときは、教えてもらう気持ちでね
一生懸命、耳傾けて、教えもらおう、子どもの世界
子どもの世界の扉はね、内側からしか開かないの
信じるおとなに向かってね
- 2 子どもの話を聴くときは、じっくり、ゆっくり、ゆったりね
言おうと思うと時間切れ、中途半端は苦しいよ
子どものつらさと言葉はね、外に出るまで時間があるの
- 3 子どもの話を聴くときは、「聴いてるサイン」を伝えてね
あいづちうって、うなずいて、子どもの言葉を繰り返し、
不安な気持ちの子どもはね、小さな合図で安心するの
「ぼくを分かってくれてるね」って
- 4 子どもの話を聴くときは、途中で止めたりしないでね
批判をしたりまとめたり、言い聞かせないでただ聴いて
おとなが口を開くとね、子どもの口が閉じてくよ
知りたいのなら、耳、開こう
- 5 子どもの話を聴くときは、瞳のサインをみていてね
子どもはたいていおとなのね、目なんか見ては話せない
それでも分かってほしいとき、瞳で合図を送ってる
見逃さないで、みていてね
- 6 子どもの話を聴くときは、顔の高さを合わせてね
上から見下ろされるとね、だれでもちょっと堅くなる
視線の低い子どもにね、しゃがんで視点を合わせてね
子どもが話しやすいから
- 7 子どもの話に答えるときは、声の調子を同じにね
大きい声や高い声、おとなのいらいら伝わるよ
子どもは意味を知らなくてもね、声で気持ちが分かるんだ
言葉が出にくくなっちゃうよ
- 8 子どもの不安を聴くときは、子どもの気持ちを感じてね
「なぜ？」「どうして？」が問い詰めに
感じてしまうとき、あるの
子どもの心配、不安はね、「不安なの？」って繰り返してね
答えは、一緒に考えて
- 9 子どもの不安を聴くときは、すぐに原因、決めないで
「地震のせいだ」「性格だ」、決めてもそれは答えじゃないの
子どもを取り巻く世界もね、子どもの心も単純じゃない
広く大きな視野で見ても
- 10 子どもの悩みを聴くときは、子どもの力を信じてね
しっかり聴いて、じっくり支え、いろんな見かたのアドバイス
だけど最後は子どもがね、子ども自身で解決するの
おとなが信じた子どもはね、乗り越えられるよ、大丈夫



これは、東日本大震災3.11で被害を受けて心細い思いでいる子どものために、気持ちが折れそうになっている大人に向けて、元気になってほしいと願いを込めて「兵庫県教育委員会防災マニュアル」に基づいて書かれています。